

## 論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	副田 麻由美
題名	Task-based language teaching (TBLT) を通して どこまで格助詞「に」「で」の習得にせまれるか		
<p>論文内容の要旨</p> <p>本稿では、Task-based language teaching (TBLT) による教育実践を通して、「に」と「で」はどのような習得過程を取るのかを分析し、TBLT が格助詞「に」と「で」の習得に寄与するのかを検証する。</p> <p>第1章では、研究の背景と本稿のねらいを挙げた。本稿のねらいは、TBLT が格助詞「に」と「で」の習得に及ぼす効果を検証することにある。</p> <p>第2章では日本語の意味解釈における格助詞「に」「で」の多義性についてまとめた。膠着語である日本語は、格助詞によって文の解釈が大きく左右される。その中でも「に」と「で」は、多義性を持つために習得が難しいと考えられる。</p> <p>第3章では、本稿の理論的基盤となる格助詞「に」と「で」の意味構造や習得順序についての先行研究と、実践的基盤となる第二言語教授法の先行研究についてまとめ提示した。本稿では、森山 (2004、2005、2008、2010) の「に」と「で」の意味用法の分類と意味構造および習得順序を中心に援用している。また、第二言語教授法については、Ellis (2003) の TBLT を援用している。</p> <p>また、第4章では、文法積み上げ式による日本語学習者と KY コーパスのデータをもとに、誤用分析をし、「に」と「で」の習得過程を考察した。TBLT 指導による本教育実践と比較するためである。その結果、森山 (2008) が主張するように、格助詞「に」の習得は、</p>			

氏 名	副田 麻由美
<p>プロトタイプである「移動の着点」の中の「移動先」から周辺の用法へ進むことがうかがえた。他方、「存在の位置関係」の中の「空間的位置」の用法は誤用が多いために習得が遅れることも示唆された。また、格助詞「で」の習得についても、森山（2008）の主張にあるようにプロトタイプである「場所」用法は早い段階で習得が進み、周辺の用法は習得が遅れることが検証された。</p> <p>第5章では、TBLTによる教育実践を通じて得た初級および中級レベルの学習者の発話データを基に、TBLTが格助詞「に」「で」の習得に及ぼす効果について考察した。その結果、TBLTは、「に」「で」の周辺の意味用法のスキーマの形成を学習の早い段階から促進する可能性が示唆された。</p> <p>第6章では、第4章のKYコーパスおよび文法積み上げ式で学ぶ学習者の分析と第5章のTBLTによる教育実践の分析結果に基づいて、TBLTが格助詞「に」「で」の習得に及ぼす効果について考察した。TBLTは、学習者にタスク活動で経験する発話とその場面とを関連付けてボトムアップさせ、スキーマの形成を促進させることが推測される。さらにタスク活動を積み重ねる過程で、インタラクションや修正フィードバックによって学習者の誤用が訂正されるため、スキーマは徐々に修正されると考えられる。</p> <p>第7章では、今後の課題について、「TBLTを通じた学習の動機付け」と「習得する文法事項を拡大させるためのタスクの設定」「誤用の化石化の回避」という3点を挙げた。第二言語を指導する上で、学習者に学習意欲を維持させることは非常に重要な要素である。学習意欲を維持させるために、学習者に自身の日本語運用能力の向上を実感させられるような振り返りの方策が必要であると考えられる。また、TBLTは、文法シラバスを使用しないうえに、学習する文法項目が学習者の発話に委ねられることが多いため、文法事項を網羅することが難しい。タスクにさまざまな場面設定を加えることによって、学習者の発話により広がりを持たせるような方策の検討が今後、必要となる。最後に、本論考の中でおこなった教育実践では、学習者がタスクに夢中になるあまり、リキャストを気に留めずに話し続ける場面が多く見られた。相手に自身のメッセージが伝わりさえすれば、正確な表</p>	

氏名	副田 麻由美
<p>現でなくてもかまわないと考えて誤った表現を使い続けると、誤った表現のまま化石化してしまう恐れがある。これを避けるためには、リキャスト (recast) だけではなく、タスクの進行を遮らない程度に明確化要求 (clarification request) などの修正フィードバックを取り入れる必要もあると考える。</p> <p>本論考の TBLT 教育実践において、学習者はタスク活動を通じて経験する場面と発話とを組み合わせボトムアップし、格助詞「に」や「で」の周縁的意味用法のスキーマ形成をし、習得へと向かうことが示唆された。また、タスク活動の中でアウトプットをすることで、学習者は誤用の修正をされ、スキーマも修正もされていくため、誤用が減少することが推察される。</p>	